

## 大槌に生きた女性―小石エイ媼と昔話―

菱川晶子

岩手県上閉伊郡大槌町に在住した一人の女性、小石エイ媼とその伝承世界について考察した。考察に当たっては、これまで五回にわたって報告した調査内容と、追調査で得られた知見をその主な対象にした。大槌町の語り手についての詳しい調査研究は今回が初めてであり、媼と昔話との関わり、またその伝承の系譜を明らかにした。

キーワード 大槌町 昔話 伝説 語り手 系譜

## 一、はじめに

岩手県上閉伊郡大槌町は、二〇一一年の東日本大震災で大きな被害を受けた町である。町の中心部は大津波に襲われ、その後発生した火災とも相まって、多くの人命が失われることになった。本稿に登場する小石エイ媼も、数え百歳を迎えた慶ばしい年に、震災によって命を失われたのである。

小石エイ媼の語りを、これまで五回にわたって本書に報告してきた。隣接する遠野市の昔話研究が早くから積極的に行われてきたのに対して、大槌町の語り手についての詳しい調査研究は、今回が初めてのみであった。

岩手県上閉伊郡に伝わる民間説話をまとめた最も古いものは、昭和十八年刊行の『岩手県上閉伊郡昔話集』（柳田國男編、三省堂）になる。本書は、昭和六年に三元社から出版された佐々木喜善の『聞耳草紙』を再編した昔話集である。佐々木喜善は遠野の人であり、その内容も遠野に伝わるものに限定されていた。

大槌の伝承を記したものは、昭和四十五年に出された大槌の民話編纂委員会編『大槌の民話』（大槌町）や、平成五年刊行の『ふるさとの大槌』（大槌町民話研究会編・刊）がある。後者は、昭和五十四年から随時出されていた民話集をまとめたものであり、平成元年から四年にかけては、大槌町高齢者ボランティア養成講座の一環として編まれた『松風』全三集（前田善治編、大槌町教育委員会）も刊行されている。

これらの書物によって、海と山に囲まれた大槌町に伝わる民間説話の概要はある程度明らかになったといえる。しかしながら、調査報告で示した土地の言葉で語るエイ媪の伝承は、小鎚を中心とした大槌町の語りの豊かさを伝えるものであり、これまで知られてこなかったその背景にある民俗の世界を教えてくれるものでもあった。

今回は、これまでの調査報告とその後の追調査をもとに、媪と昔話との関わりについて、また媪の伝承の系譜について考察することにした。

## 二、生い立ちと昔話

エイ媪と昔話との関わりを紐解く前に、まずは媪の半生についてみておくことにする。

エイ媪は、明治四十四年（一九一）八月二十二日に誕生した。父は小鎚の山岸に住む山崎大蔵、母は同じ小鎚の上塚出身小笠原タキである。五人兄弟の三番目であったが、幼い時に二人の兄弟が亡くなったため、エイ媪は三人兄弟の次女として育つことになる。

媪の父親は隣の本家から簞分けした分家であり、木挽きや農業に携わっていたという。土地を切り開いた際の財産もあり、農業が忙しい時には農作業に、また農閑期には胴乱結びを行っていた。茶筒のような形の胴乱には、桜の皮を加工して冬に乾燥させたものもあった。エ

イ媪が幼い時には東京や仙台から籠を背負って買い付けに来る人もあり、トウジンや今の薬屋のような姿をした人もいたことから、薬や煙草入れ、あるいは植物採集等に使用するものだったと考えられる。

この胴乱は受注生産をしており、納期に仕上げるために徹夜での作業もあったという。洪皮を使った良品であれば、一つが一円や一円五十銭にもなり、大きな収入になっていたようである。一日に十作ることになれば、多い時には一冬で何千と製作することもあった。四円あれば米俵が一俵買える時代である。当時は生活にゆとりがあり幸福だったと媪は語っている。

そのように六歳までは不自由なく暮らしていたエイ媪だったが、急な父親の死によって人生が大きく変わることになる。一家は一時期母の実家へ身を寄せるが、山崎の祖母の計らいでまたもとの家に戻ることになる。

しかし、同年の子ども達が尋常小学校へ通うようになって、媪は学校に行くことができなかった。「みんながカバン背負って羽織袴で学校さ歩く時、われはポロ着て山畑さ歩かねばなんねえものね。はずかしい。おかしく思われるような気持ち」だったと、媪は当時の心境を語っている。

大槌町で初めて創立された尋常小学校は、明治六年の小鎚小学校だった。明治二十年に大槌尋常高等小学校と改称された同校の学齢児童数に対する就学児童数は、少し時代が下る大正一五年の記録では、九七五人中九七一人とほぼ全てに近い児童が就学している。多くの子どもが学校に通う中で、幼い媪は畑仕事に従事していたことになる。

エイ媪に対して母親は、学校の勉強は教えないが、別な勉強の方を教えるから、学校に入らないから悔しいと思うなよと語ったという。そして、「泥棒するな。乞食するな。泥棒と乞食をしなければ何も怖いことはねえ。ポロを着ても。」と諭したのである。春になると、

畑から梅やぐみの実、桃等の恵みがもたらされ、一息つくような生活を一家は送っていたのである。

そのような状況の中でも、一回聞けば頭に話が入ると語る嬭にとつて、読み書きに対する関心は薄れることがなかったようだ。年の近い甥が後に学校に通うようになると、自らも一緒に平仮名を覚えたといいう。

その後戦後の食料不足で多くの人々が困窮した時には、自分が空腹感を味わうことなく食料に不自由せずにいられるのは、親の教えがあったからであると、改めて親の有難さを噛み締めることになる。

では、次から具体的にみていくことにしよう。初めに示す話は、母から聞いた昔話「牛若丸」である。

## (一) 牛若丸

牛若丸という者が、親早く亡くなったんだけど、女親一人で育したために、強くなれ、強くなれていうので、昔の学校さ行ってたんだね。そしたら昔の学校が、先に入った者が先生のそばで習ったものだけもね。でもその牛若丸は後から入っても先生のそばで行ったんだと。そして先に入った人たちより勉強ができたんだね。そして、早く勉強できたから、お前はこれでええから、お前の勉強するのは、鞍馬山へ行って稽古をせいってことで、先生が、昔だから和尚様でねえんか。その人が、この扇、青い扇をやっから、山へ行ってこの青い扇であおげばお前の先生は下りてくつから、それからせいって、扇もらったんだね。

そしたつてその親は、親父は侍だつたつうからね。親父の持った刀を持たせてやったんだね。そしたつて、あおたら天狗が下りて来て、一日いっぺんは手玉にとつたんだと。重ねて天狗が投げてよこして、重ねてまた投げてよこして。その人が疲れ果てたんだね。

だからこれではハアおれは呼ばれねえから、刀を取って、上がりしなに屋根板を下ろして、杉の木の板のね、天狗が隠れてる杉の板を下ろしたもんだと。そしたつて、天狗どもハアこれさ及ばねえと思つて、こわつ葉こわつ葉、葉を拾い集めてすべしてねえだんだね。そして見たつて、天狗は疲れてたけど見えねえだつたと。その人は和尚さまから木枯らしの宝珠っていうお守りもらつてつたんだと。そしたつて、天狗つうものがこだかの宝珠つうものを持つてつうが、そのお守り盗みてえなあと思つて目に当てたんだと。そして天狗と寝込んだ時、自分のと交換したんだね。

次の年だか次の日だか、何日かもよつてから、さしだはいてね、その天狗の持つてるいいお守りを自分が持つたから、天狗をどけ飛ばすようになったんだと。牛若丸はね。天狗をどけ飛ばしてその上を飛び歩つたんだと。

そして、天狗どもハ負けて、お前はこれで終つから、今度は京さ行けつてことで京さよこされたつう。そして五条の橋つうものを渡つたんだね。その人は。さつさ下駄はいてたりこんな恰好して、少年こだつたず。

そしたら弁慶が出はつてきて、「おい小僧、小僧、おれとしてやっぺし。おれは九百九十九本刀を取つたんだ、今までここで。お前から取れば千本になつから、おれとやっぺえ」つうことになつたんだつて。そつて今度は弁慶とやつたんだつてね。

そつたども、今のこだかの宝を持つているために、なんぼ弁慶がこだどと叩けばこちち飛んでくる、こちち叩けばこうする、及ばなかつたんだつて。それで弁慶が牛若丸の弟子になつたんだつて。

牛若丸とは源義経の幼名である。後に平泉の高速で自害したとされる義経の伝承は、少数の郎党と共に閉伊海岸を北上して北海道へ逃れ

たとして、その途上に多く残されている。大槌町の室浜にはホウカン様の社があり、金沢には弁慶の手形のついた力石も伝えられている。この「牛若丸」もその一つの流れと考えられる。

エイ媪は本話を母親から聞いており、幼少時から弁慶との出会いまでの内容は、子供に語り聞かせるための話になっているように思われる。早くに父親を亡くし、母親一人に育てられたと語られる牛若丸は、エイ媪自身に重なる人物像だったといえる。話中にある「強くなれ」という母親の言葉も、それを聞く媪たち兄弟に向けられていたに違いない。人が生きて行くためには知力が必要だとして、媪は話の最後に次のように語ってくれた。

だから必ず人間つうものは知力がねばだめなもんだつて教えられたつからね。男の人と喧嘩しても負けなかつたの。そのぐれい知力、それこそ知力育おがしてもらったつたの。親から。だから牛若丸もこうゆう親のねえ子で、こういう風で育つたんだから、人間つうものは自分の努力次第で、良くもなんだし、悪くなんだつから、努力せい、せいつうことで教えられたつから。なんでかんでハ働くことべ。

天狗や弁慶等の強者をも凌ぐ人物として成長して行く牛若丸の話は、たとえ恵まれない状況にあつても、人間は自分の努力次第で良くも悪くもなることを、幼いエイ媪に教えてくれたと理解できる。

次の昔話をみよう。

## (二) 金沢の炭焼き

昔ね、金沢に、大した稼ぐ若え者がねえ、あつたんだつて。そしたつきゃ、奥さんの方は一つも稼がねえで、家にごろごろつていたと。奥さんが稼がねえでね。その炭焼きが、おれは何の因果でおら家の嬢の

方があつて、ごろごろつて。野へも山へも出て稼ねばならねえつて、色々なことをして、まず稼いだんだと。

そして稼いでいるうちに、八月十五日の晩に、窯さ火を燃やさねばなんねえために、山さ行つたんだとす。そしたつきゃ、金沢のお寺ではね、お寺の鐘を盗まれたつて、大して騒いでらつた時だつたんだと。

八月の十五日の晩に、嬢さまから何か貰つていつたんだか、十五夜のお月様が出てきたから、自分の食べる物をあげて、すすきとかね、萩をあげて拝んで、われ食べてからいたんだとす。そしたつきゃ、随分山の奥から、太鼓を叩く音あつたんだと。何なんだかね、太鼓だの鐘の音あつたんだと。

「ありや、お寺では鐘が盗まれたつていつてらつたが、山の奥に鐘の音がするがどうして」

つて、その音を頼りに上がつていつたんだとす、その人が。そしたら狸等がその鐘を盗んでいつて叩いていたつたんだと。で、その炭焼きの人は、

「お寺で今この鐘盗まれて大して騒いでいるが、お前さんは何でこの鐘盗んできた」  
つて言つたら、

「子どもがいっぺえいるために、子ども遊ばせるために持つてきたが、おめさんが持つてつて返してけろ」

つて言つたんだと。その炭焼きさね。

そしたつきゃ、その炭焼きは、

「おれが返して持つて行つたれば、おれが盗んだつて思われるつべ。だから狸の子一匹くれや」

つて言つたんだと。

「子どもは絶対やれねえから、髭を三本抜いて上げ下げしてお前さんやつから、これ持つて行つてけろ」

「おれ、狸の髭もらったって、どうもなっこともねえんだ」って言ったわけ、

「いや、そうでねえから。この髭持って行ったら、お宅の奥さんの顔を見る」

って言ったんだと。

お宅の奥さんの顔を見ればわかっから、これ持って行って、そういうことでその人が鐘預かって帰ってきたんだってね、山から。そっからお寺さ持って行って、まあ訳を喋って、鐘をお寺さ返したんだと。

それからその髭を持ってきて、若いもんがこう嬢の顔を見たっきゃ、貧乏神だったと、その嬢が。だっから仕事をしなかつたんだと、一つも。それで、ああ、これはおれなんぼ生きて一生稼いだって、どうにもなんねえって思って、その人が家出たんだずもね。家出て、そっでその髭を持って歩いて、占いみたいにして顔を見たりして歩いてたの。

ある日ある茶屋に行つて、うどんやら何やら食べて、その嬢様の顔見たんだと。そしたら福の神だったの。その嬢様が。一人でも一生懸命稼いでいたって。そんで娘見たつたら、娘は弁天様だったんだと。そしたらその炭焼きの人は、ああ、こつちの家族はなんたらええべ。嬢様の方はお大福様で、娘は弁天様だの、まあ。

そしたら今度は奥さんの方が、その髭っこおれさ貸せって言ったんだと。

そしたらその炭焼きの顔を見たっきゃ、お大福様だったと。そつたつから、ああ、おめさんは大福様だ、ハ、おら家の髯になってけろつうことになつたんだだけどね。まあ、それで髯になって、大したいい按配で稼いで働いてたんだと。

そしたっきゃ、なんぼ貧乏神でぶんなげてきても、自分の奥さんと思ひ出すんだね、その旦那さんがさ。だから言つたんだと、寝言でね。

おれのかはどうかこうにかこうして貰って食べたなりあれしたりしてつが、おら家の貧乏神はどうなってべえなあって、寝言を語つたんだと、毎晩。

そつてその奥さんな人が不思議に思って、

「おめさんはこういうことを言つてえが、誰か置いてきたんでないですか」

って聞いたっきゃ、

「置いてきたども、とつても貧乏神で、一生一緒にいらねえって置いてきた」

って言つたっきゃ、奥さんがね、

「なんぼ貧乏神であろうと何であろうと、お前さんの方だけ幸福になつてられねえんだから、その嬢様も連れてこお」

つていうことになつたんだとす。そつてその人連れてきたんだと。

そしたっきゃ、その人は他の家さきてただで食べられねえつから、一生懸命働いたんだと。そつたらその人も福の神になつたんだと。そしてそこでは良くて暮らしたんだということだ。

本話は祖母から聞いた話であり、実は昔話の後に次のような語りが続いていた。「だからね、昔の人におれは小さい時に喋られたつたの。せつこきすれば貧乏神なんだと。だっから、働けば誰でも福の神になんだつから、働くことをすんだよつて聞かせられたつたの」。

「せつこきする」とは、怠けるといふ意味である。働きの夫に見放されたせつこき者の嬢が、改心して懸命に働くようになると、貧乏神が福の神になつて暮らしも良くなったという内容だった。エイ媪は、このような昔話を通して働くことの大切さを教えられてきたのがわかる。媪が終生この教えを守り続けていたことは、結婚後の半生を辿れば容易に理解できるだろう。次に紹介する。

エイ媪が小石福治氏と結婚したのは、十八歳の時だった。十六歳の三月に小石家に手伝いに入り、その後嫁いだという。小石家との縁は、媪が幼い頃に遊びに行った家が小石家の祖母の親戚の家だったことによる。十三歳の時に仲人を介した縁談があり、当地で言うところの「けもらい」されたのである。小さい時から唄ったり騒いだりするのが好きだった明るい媪の性分が、小石の祖母に気に入られたのだろう。

舅と姑に小姑が七人いる婚家は、八畳二間と二階に六畳二間の間取りの家だった。それまで田仕事をしたことがなかったエイ媪は、三年程苦労が続いたという。嫁いだ頃は皆小作の時代であり、収穫の半分以上は地主に納めなければならなかったのである。

小鎚から分家した舅は、初めは手を取って教える人だったが、一回教えたら二回は教えてくれないため、その後は人の仕事を盗んで覚えたといい。田の草も三回取る必要があり、すべて手作業の仕事は大変だったと語っている。

姑は丈夫で厳しい人だったようだ。嫁のエイ媪は、「箸を投げれば外に出て働いた」というように、家事は姑に任せて専ら外へと仕事の世界を広げていた。

薪の商売もしたという媪は、朝は四時や五時に起き、朝間に三回も四回も歩いたという。薪や野菜を売りに行く際には、舅から公定価格より高く売らないように注意を受けていた。当時は石鹼や糸等の配給がないため、不自由な生活であったともいう。

戦後の農地改革によって田畑が解放された時には、小石家は田を一町歩買って作るようになる。田植の他、枝や草刈りをするカラハラライのために四十人の手伝いを頼んでいた時期もあり、媪は舅にも認められる働きぶりだったようだ。また媪と福治氏との間には七男二女が誕生し、家族は一時期十六人になっていた。

その後小石家のあるあたりに国道四十五号線が通ることになると、昭和四十二年に土地が安く買い取られ、敷地は狭くなる。そして、二軒目を建ててようやく落ち着いたのも束の間、福治氏が病いに倒れてしまう。その後六十歳の頃から床に伏すようになり、六十七歳でその生涯を閉じるのである。

また、昭和六十一年には町の下水処理場の建設に伴い、小石家は田畑を全部失うことになり、その後は田畑を借りる形で農業を続けるのである。

四男の幸悦氏は、媪のことを普通の母親とは違い、仕事に一途な人だったと語る。舅の言う通りにやっているうちに、同じ人生を送ることになったという媪は、のんびりとした父親に代わって一家の稼ぎ頭として働いてきたのだった。話に興味のある幸悦氏が媪から昔話を聞いたのは、畑仕事を手伝う時だった。歩きながら、作業をしながら色々な話を聞かせてもらったという。寸暇を惜しんで働いていた媪は、「金沢の炭焼き」にも負けない働き者だったといえる。花好きの媪は、九十三歳になるまで自作の花を売りに出掛けていたのである。

### (三) さくべえ、ふくべえ

昔々、さくべえとふくべえという人が小鎚にあったの。そってさくべえという人が子供がなくて、まず惨めに暮らしてわげだ。子供がねえと、自分たちはお爺さんとお婆さんと暮らしていかねばならねえからね。そしたつからその、ふくべえという人の家には子供があつて現場に出ない人たちだったし、さくべえの方は一生懸命炭焼いたり薪伐ったり、川さ竹で組んだ簀を掛けて魚を獲って、それで持ってきて売ったりして暮らしたんだと。そのさくべえつう人はね。

そしたらふくべえつう人は、さくべえの爺様に一人っこ獲られんようにこの上さ持つて行って掛けんがと思つて。その上の方さ掛け

たんだと。そしたらこの下さ入んねえかと思つて。それでもその人の簀さ魚きて入るんだって。その上掛けた人の方の簀は入らないんだって。だっけ、その人は待つてろ、今度は入つてこつたあから、夜中に行つておれが入れて今度は獲つたんだあと。そしたらさくべえつうお爺様、

「ああ良かったなあおめさの簀も入つて。おれ獲れつてもほんとに気持ち悪かった、良かった」

つて、そうされたのも知らねえで喜んだの。

そしてある時、上さ掛けたつからかういふ根っこが流れてきて入つてらつたの。ふくべ爺じのさね。だっけその爺様が、この根っこおれ何せえと思つて下の方さ転がしてきて入れたんだと。罫の魚は獲つて。そしたらそのお爺さん、意地悪でねえお爺さんの方が、「ああいいこととした、根っこでも何でも入つたものは宝物だ」つて家さ持つてきたんだとす。そつて

「お婆さんお婆さん、今日は魚は入んなかったけどもこんなあ根っこ今入つてらつたから、今割つてから薪にすべし」つてまさかりを当てたんだと。そしたらその木がさくつと割れて、中から子犬が出はつたんだとね。そしたらその爺さんと婆さんが喜んで、孫も何もねえのに、子犬が出たあからつて、子つこの犬を喜んでおがしたんだと。

で、おがしたつて、お爺様が炭焼きに行くべえつて言つたつて、お爺さまの後追つたんだと、その犬が。それでそのお爺さまは「やべやべ」つてまあ連れてつたんだとす。そしたつて、そのお爺様が窯の炭を焼いてるうちに、その犬がどこか歩いてから、騒いで吠いたんだと。そつだからお爺さんは何だか何かに食れねえばいいかと思つてたまげて飛んでつたつて、鹿、鹿を喰ひ殺してその犬が叫んでらつたんだと。それでそのお爺さんが喜んで、またその鹿取つてきてその晩にお爺様とお婆様と犬と三人で食べたつて。そつたら意地悪爺さん

やらお婆さんが、

「お主さんいいな、何食べたつた、大したいいのを煮たな」

ときたと。だから

「こらおら家の犬が、今日鹿獲つたもんだから、鹿汁にしたつから持つてつて食べて」

つて聞いたんだと。

そしたつて、そのお婆さんがその次の日犬借りさきたんだとす。

「だあその犬こ、おら家さも貸してけれさなあ」

つたつて、

「だあまあわかんねえがこんなもの、まだ小さいもんだつて」

「いいから貸せ貸せ」

つて引張つて行つたんだと。やんだがるの無理に引張つてつて、山さ連れてつたんだあと。そしたつて、その犬がねえ、行き行きしてから大したその騒いだつから、そのお爺さんが、あ今日も鹿獲つた風だつて思つてその意地悪爺さんが行つたつてやね。カミバチ、あのスズメバチの巣さ入つたんだと、そのお爺様が。そしてどつとも刺されてきてやあ、その犬殺して、犬はハア殺してしまつて、この犬はおれを蜂に刺させたがつて、昔は箸木つて箸作る木があつたもんだ。その箸木の根さ埋めてきたんだと。だつから、お婆さんが夕方になつてから「だあおら家の犬つこさ迎えさきたがなあ」つてやつてきてそう言つたつて、

「何おら家のお爺様こんなわけですズメバチの巣さ犬が入れてこんなに刺されてきて、こんなだつから、殺してからその箸木の根さ埋めてきたつて」

つて言うたんだと。お爺さんとお婆さんががっくりして、まあその、埋めたとき行つて、まあ花刈つてきたり何したりして拜んで、その木つこを伐つてきて塔婆にしたんだとす。塔婆つて、犬の戒名書いて

塔婆にして、そして床の間さ置いて挿んだんだと。

そしたっけ、次の朝間になったっけ、大した唸るような音がするんだあと。そしたっけ、お爺様とお婆様、何か犬の唸ってたようつたらまあ、聞くだべかってそんでもって見たっけ、

「菰こもしけむしろ筵むしろしけ、菰しけ筵しけ」ってその塔婆がしゃべったもんだあと。それでお爺様とお婆様は、そこから筵むしろだの菰こもを持ってきて敷いたっけ、まあ米が降るが降るが、山のくれない降ったんだと。米がその塔婆からまばいたんだとす。

その話聞いてから、今度はその塔婆借りさきたんだと。お婆様がね。そしたっけ、また貸してやったんだと。その塔婆。そしたっけ、降るも降る、今度は泥ぶだの何だのつうものびゃあと降って、まるつきりハわかんなくなつただと、中が。それで竈かまどを入れて焼いたんだあとそれ。でそのまたお婆さんが、また塔婆返してもらいに行つたっけ、

「何、それこそ米は降んねえでこんなのうんびゃあ降って、掃除したさねえ」

って、そのお婆さんがだつから竈かまどを入れて焼いたがって言つたんだあと。だけんそのお婆様また泣き泣きなら骨でもって、灰かつこ集めてきたんだとす。そつて灰つこ集めてきて、その灰挿んでから、雁かりが飛んできたんだと。その時お爺さんが

「雁かりのまなくそ入れ、雁かりのまなくそ入れ」

つたっけ、雁かりがその灰が入つて落ちた、花咲か爺みたいな話だんすげ。で落ちたんだと。ほつて今度は雁をおつゆに入れて食つてたっけ、そのお婆さんがまたきたんだと。だっけ、

「何これお主さんたちあやの、おれ家の塔婆焼いたのの灰つこ持つてきて、雁かりが通つた時撒いたっけ、雁かりが落ちておらは雁のおつゆ。お汁食つてたが」

って言つたんだあと。そしたっけ、「ああうんでおら家の灰さ撒いて

雁かりが」って思つて意地悪婆が行つてその灰瓶詰めて、そつて雁のくるの爺様を屋根の上さ上げて待つてらつたんだあと。だっけ、雁かりきた時「雁かりのまなくそ入れ」って言えはいいのに、

「爺おやのまなくそ入れ」

つて言つたと。そつたらお爺さんのまなくそ入つてお爺様落ちてきたんだあと。そしたらそのお婆さんさあ、お爺様でなく雁に見えたんだあと。目がおかしくなつたんだか間違えだかさあ。そつてそのお爺さん落ちてきたのを、木そこにあつたのではたいんだあと。そしたっけ、爺さん

「婆おばはたくな」爺さん

「婆おばはたくな」

つて言つたっけ、「何爺おやつてきいてがんな」つてはたいんだつて。死んで見たっけ、それお爺様だつたんだとす。

だから意地悪すればそういうことになんだから、必ず人さ意地悪するなよつて。そういうことばつか聞かせられたあの。

隣の爺おやに分類される「雁取り爺」の一種である。川漁で得た木の根から子犬が現われて、良い爺おやには山の獣を授け、死後も米等の幸をもたらしのに対して、意地悪な爺おやには蜂や泥を与えたと語られている。

本話では、良い爺おやと悪い爺おやの対比のみならず、それぞれの伴侶である婆おばたちにも話が及んでおり、結末部では悪い爺おやは悪い婆おばによつて命を奪われたと説かれている。意地悪の末路を強く印象づけることで、聞く者に正しい生き方を指南する話になっている。末尾に「だから意地悪すればそういうことになんだから、必ず人さ意地悪するなよつて。そういうことばつか聞かせられたあの。」とあるように、幼い頃にこのような話を繰り返し聞かされることで、エイ嬢は人としての在り方や、行いの善悪を理解していったと理解できる。



エイ嬸を古くから知る人は、健康で優しく、愛情持ちだったと嬸について語る。人の悪口を喋らず、弱い立場の人を励ます人だったという。学校での学びの機会を持たなかった嬸は、母や祖母達から生きた教えを授けられてきたのだろう。そこには、子ども達をまっとうな人間に育てたいという強い願いと、先人達が育んできた昔話の持つ力があつたと考えられる。文字を解し、情報が溢れるようになる少し前の時代に人々が行っていた、子育ての一面がここに垣間見える。

### 三、二つの系譜

次の話は、エイ嬸の実家の本家に伝わる伝説である。

#### (一) 河童の話

おれの生まれた村の話もあるの。そこはね、河童の話なの。おら家のね、先祖が、どこからか来た落人だったんだぞどもね。作右衛門と作之丞って兄弟のあれで、八幡様を背負って来て落人になったんだ。八幡太郎の家来だったか、落人として山の岸まで来たので、そこは山岸というの。村の名前は、山崎という姓を名乗っている。そつてそこでは大したいい馬を預かってらつたんだと。

そしたつて、日照りで、水がどこにもなくなつたんだと。そしてね、その下に河童の淵があつたの。その河童のいる淵さ連れてつて水さ入れたんだぞもね。水さ入れつとこはどこもなくて。そして淵でこう待つて馬だけ入れてるうちに、馬が淵から飛び出したんだと。飛び出して、そしてハア馬屋に走り込んだんだと。そして飛び込んだつけども、その馬ハア、ぐるぐる回るして一つも何しねえで、フンツフンツて鼻つて吹きながら跳ねつたんだと、馬屋の中をね。それで、昔は何もねえ時だつから、木だか竹を丸めたのさ火付けて馬屋の中を見たんだと。そしたら、銅葉桶ひっくり返つてたのを、ほらこう桶を被つて隠れて

いたのをあけて見たつて、河童が目え光らかに、涙こぼしてらつたんだとす。そして

「命だけは助けてける。これからおれは何にも悪いことはしねえから、命だけ助けてける」

つて、自分の指を切つて、書いたんだとす。命だけ助けてけるつてね。これからおれは悪いことはしねえからつてことで。

そして助けてやつたんだとす。そこで。そしたらその約束に、お前さんたちが何でも困つた時があつ時はおれさ相談に來いと。そしたら何事でも私が相談にのつてあげますつことがあつたんだとす。その河童がね。

それでその人たちが、馬が年取つて、馬あ買わねばなくなつたんだとす。お金を欲しいけどどうせばいい、ああどうしてそこさ行けばいいのつて聞いたら、その川のとこさ來たら三回手打ちせば、私が出はつてきますと言うんだと、その河童がね。

それでその人が行つて三回手打ちしたら、河童が出はつてきたんだと。それで昔だから、何錢だか何文だか知らねえけど、お金がねえば馬は買われないので、お金を恵んでくろつうことをお願いしたんだと。そしたら、明日の何の刻、昔は今だば丑の刻だの午の刻だのつて言うたつてす。何とかの刻に出はつて來て、橋のたもとさ出はつて來、と言つたんだと。そつてその人がその時間に出つたんだと。そしたら、お金は昔の、通してお金が繋がさつてね、ちゃんと出はつてあつたんだと。

そして、その家ではね、いつでも何かの時に行けば、繋がつて掛けさつてつから、ハセつて言つたんだと。錢バセが掛かつてるつて言つたの。錢バセがこの家さ掛かつてるつて。今でも錢バセつて。

で、その家ではね、水天宮とか何とかつていうんだぞもね、河童の名前が。そつてそこで、八幡様のほとりさお堂つこ立てて拝んでん

の、今でもそこじゃ。そつて今だにその家には、今から何百年も経つたこつたども、何にも悪いことなく暮らしてんの。<sup>8)</sup>

媪の先祖が、水をやるために飼馬を日照りでも水の絶えない淵に入れたところ、馬が急に川から飛び出して馬屋に駆け込む。馬の尋常ではない様子を不思議に思い、明かりで馬屋の中を照らしてみると、河童がひっくり返った銅葉桶の中に隠れていたというのである。

河童の命を助けるかわりに困った時には力になるという約束は、後に馬を買うお金を河童が用立てる形で果たされたと言われている。綱のようなものに通した銭が橋のもとに掛けてあったことから、その家は「銭バセが掛かっている」といわれるようになったという。地域の氏神として祀られている八幡様を伝えた本家に、古くから伝承されている話である。

エイ媪が誕生した小鎧の家は、本家と隣り合うようにして建ち、本家が小鎧の高見という所から来たことから高見という屋号を持つのに対して、媪の実家は高見屋の屋号が与えられている。

八幡太郎義家の家来であった、先祖の作右衛門と弟の作之丞の二人が八幡太郎のお姿を持って来たといひ、洪水で流れた時に現在の高台にこれを祀ったと伝承されている。高見から山岸に移り住んだのもこの頃のことと思われる。山の岸に家を建てたので山岸という地名になり、山岸を切り開いて開墾した当初はこの二軒の家だけであった。作右衛門はまた、羽黒山の修験宝順坊とも伝わっている。

両家近くの階段を登った裏山には村の鎮守があり、先祖が伝えた神像が祀られていた。七、八百年前のこととされる。この八幡様は正式には山岸八幡宮といひ、御祭神は菅田別命（ホンダワケノミコト）という説もある。社にある最も古い小幡には天明二千寅三月吉の文字が記されていることから、遅くとも天明二年（一七八二）には祀られて

いたと理解できる。また、大槌氏が当地域を治めていた時代に、八幡宮の境内から伐り出した杉の大木で大船を造ったという伝承もあり、城主孫八郎政貞が天正十七年（一五八九）に創建したとも伝わる古社である。<sup>9)</sup>

毎年八月十五日に祭を行うこの八幡神社の境内には、河童のような姿をした自然石の水天宮が祀られている。オシラサマも祀られていた本家には、「河童の証文」があった可能性もあるようだが、集落の火災ですべて焼失して今はない。その際八幡宮も焼けそうになったのを、村人たちが守ったのだという。

本話のような河童駒引き譚は広く日本の各地に分布しており、駒引きに失敗した河童が命乞いをして「詫証文」をしたためたり、助けてもらった礼に魚を贈ったという伝承も数多くみられる。大槌町に近い岩泉町にも、家々の先祖にまつわるものとして類似の話が伝わっている。しかし、詫証文を残したとのみ語られているそれらに対して、エイ媪の語る河童は願いを叶えてくれるものとしてあり、石像も建立されていることから、信仰対象としての要素を色濃く残しているといえる。また、願いの品を用意してくれるとの内容は、必要な腕を揃えてくれると語る「腕貸し淵」の伝説にも通じている。水の管理に携わる旧家の伝える話とも見做せ、本話によって、エイ媪が歴史ある家の系譜にあることが窺える。

続いて示すのは、エイ媪の母親の実家に伝わる話である。

## (二) 塚本万蔵

小鎧のね、ずうつと上に新山しんやまつて牧場つてあんだんすげ。新山牧場。その辺にね、昔の七里塚があんだでば。上塚つてとこあんだでば。種戸のそばに。これ通つて、新山さ行かねえで、和山越えて殿様が行つたんだと。昔は。ここの道路をね。そして歩いた時に。塚の前を侍が

通るのを見て、なんぼ十歳ぐらいなんだかの息子が侍になりたかったんだと。それでその、家の人たちにしゃべれば何かされつから、逃げて南部の殿様さ行ったんだと。そして殿様の草履持ちになったんだってね。そして一回ここを通ったんだと。その子供が草履持ちしてね。そしてしたらほれ、辰の年生まれで「たつ」と付けたんだと。昔はそういう名前だったからね。

そしてたつきゃ、たつが来るから見べしって家族の者がね、今日殿様が来ればたつという人が草履持ちして来つから、見べしというので、道路は藁で作った筵を敷いて座ったんだと。来るのを待ってたんだと。そしてたついかにも来たども、息子を見られねえんだと。殿様のだから頭上げられねえわけだ。そしてこうやって見てから、

「たつでねえか」

たつきゃ、

「母さんでねえか」

って聞いて通って、その行き会わねえで通ったんだと、その人が。

それから来たことがなくて、それから何十年か経つうちに、ほれ田舎の者だからハまじめ一方だんすべ。田舎生まれだからまじめなわけだ。それで殿様さも、侍の動作も大したええ具合だった風だものね。これすれば「はい」、それすれば「はい」つつうようにね。それでその人が早く侍の偉いになったんだとす。そして何年も経たねえうちに殿様の膝元役になったんだすもね。

それで何年か経ってからその家さ寄越されたんだすもね。そつて家さ寄越されて来たつきゃ、代官所つうのがここにあったんだすも、昔は三陸一だったんだと、大槌というところが。今はハどつこの人も釜石が立ってから釜石がだんだん良くなって、大槌が駄目になったが。昔は三陸一で、どつこの人たちも大槌さ来ねば世を渡れなかつたんだと。それでその代官所の前を通つたんだと、その人が。

そしてらば代官所はちようどその日がお花見だったんだと。それで舞台作って大したお花見であったとこ通つたんだと、その人がね。そしてたつ、われ侍のお偉い様だから、悠々として通つたべ。そしてら、代官所のお偉い様が、

「そこ笠被つて通る者は何者だ、笠脱げ」

って言つたんだと。侍の笠を被つて来たんだすべ。そつたつども聞かずふりして通つたつ、

「笠脱げつて言つても聞けねえか、ここの前笠被つて通る者何者だ。それ、共々笠脱がせろ」

って言うたんだと。そしてたつ、わーってみんな立つたべ、その人やるべえして。

そしてらその人が、ちよつと通り抜けてからこう戻つて、

「おれの笠脱げる者があつたら脱笠いでみる。南部殿様膝元役塚本万蔵とはおれのこつた」

(万蔵つていう名前もらつたんだと。塚本万蔵という名前もらつたんだと、その人が殿様から)。そしてら、舞台上上がつてらつた人たちは、代官所の偉い人様もなも、水戸黄門のようにみんな舞台から降りて、

「すみません、すみません。堪忍して下さい」

つて、通るくらい偉い侍になったんだとす。そしてその人がね、実家さ何お土産に持ってきたでばね。殿様の脚絆と、刀だの槍も貰ってきたんだと、古いのをね。それから草履と。それを貰つて帰つて来たんだつて。

エイ傭が母の実家に泊まりに行った際には、祖母がこの話をよく聞かせてくれたという。先祖の立身出世譚といえる。南部藩の殿様から下賜された槍や刀は、戦争時に供出させられて今はない。家宝として

大切にされている脚絆や草履を媪自身は実際に見たことはないようだったが、大工の棟梁である四男の幸悦氏が、屋根の修理の際に白い麻の緒の草履や脚絆が棟上げに結びつけられている様子を教えてくれたと語っている。

また、実家には樹齢数百年になるといふ大きな霧島つつじの木もある。やはり殿様から頂戴したと伝わるこのつつじは、庭と畑の中央に立ち、敷地の中でも一番良いところに植えられている。山つつじが多く見られる小鉾周辺では目にしない珍しい種のつつじだが、いつしかその根元から水が湧き出すようになり、「霧島つつじ」と呼ばれて、今も家人や道行く人々に潤いを与えている。

屋号の塚は、家が七里塚の上にあることに由来する。土地の名も上塚である。大槌の代官所からちようど七里の所に位置するために、七里塚が立てられていたのである。そしてこの家は、大槌の町から遠野へと抜ける大槌街道沿いであり、琴畑や和山、また種戸坂を越えて橋野方面へと三つの道が遠野へ繋る地にあった。

塚の家は農家だったが、そのような立地であったために、塩の行商人や富山の薬売り、また遠野からの駄賃付け等多くの旅人が宿を乞う家だった。エイ媪は次の様に語っている。

母親の親父が占い師だったの、六部さんから教わったってね。占い師してたわけだ。

「泊めてけろ」ということで、乞食でもなんでも泊まり泊まりました。ただで泊まったの。六部さんでもよく泊まったもんだって。よく箱さ、仏様背負ってね、背中向けて。仏様にあげたものを、どこさ悪いところを治すってあげてね。お札売る人もいたっけど。欲しい人は買うけど。よそから来た人のはそう買わない。

世話になった旅人たちは、一晩の礼として物を置いて行ったり土地

の話をしてくれたようだ。六部からは占いの術も伝授されていた。そのような外部の人々が集う環境にある家には、多くの場合がそうであるように、やはり多くの話が伝えられていた。母が昔話を知る人であったのは、前に示した通りである。また、母の実家に遊びに行ったエイ媪は、三歳の頃から囲炉裏端で語る旅人の話を直接耳にして、夢中になって聞いていたといわれている。このように、媪には父方の伝承に加えて、母方の豊かな伝承の系譜もあったのである。

#### 四、結び

エイ媪の語りは、伝説が十話、昔話が二十一話、世間話が一五話、年中行事が五例、また民謡が四曲収録されている。本来はもっと多くの語りを記憶されていたと思われるが、初めて出会ったのが媪が八十七歳の時だったこともあり、聞き得たのはこれらがほぼ全てになる。しかし、媪の好んだ伝承が最後まで語られていたものと筆者は理解している。

生い立ちで示した通り、媪の子供時代は同年代の一般の子どもに比べて厳しいものだった。学校に通うことが叶わず、生きるために畑仕事に追われる日々だったのである。しかし、母や祖母達から繰り返して聞かされた昔話を通して、人としての在り方や生き方を学んでいたことがわかる。それは、苦境にも決して負けずに自らの努力で道を切り開いて行く「牛若丸」や、働くことの大切さを説く「金沢の炭焼き」、また意地悪を咎めた「さくべえ、ふくべえ」の昔話に象徴されていた。

そのような媪の伝承の系譜には、主に二つを挙げることができる。一つは、媪自身の実家とその本家であり、本家の先祖は八幡太郎義家の家来であったとする、山岸の草分けの家だった。先祖が持ち伝えたという義家の像を祀った神社が、集落の鎮守として大切にされていたこともわかった。また一つは、同じ小鉾にある母の実家であった。当

家も武士の先祖を持つと伝わる家である。母の家はまた、大槌と遠野を結ぶ大槌街道沿いにあり、地の利もあって旅人が宿を乞う家であったため、そこは多くの話が語られる場となっていた。加えて、母の弟も城壁の修理に当たる土方として各地に出向いていたことから、外地の話をせがむ幼い嬸に話を聞かせていたこともわかっている。また、沿岸の浪板に住む嬸の兄弟との交流もあった。

根本には話を好んで聞いたという嬸の性分も関与しているが、嬸にはこのように父方と母方との二つの豊かな伝承の系譜が存しており、これがエイ嬸の語りをバラエティーに富んだ豊穡なものにしたと理解できる。そしてエイ嬸は、大槌の歴史と民俗をも私たちに伝えてくれた、数少ない語り手の一人だったのである。

## 註

- (1) 本書には、エイ嬸の話も十七話納められているが、読みやすさを考慮したためか、簡略化された表記となっている。
- (2) 大槌町史編纂委員会編『大槌町史』下巻（大槌町役場、一九八四）一三四九頁。
- (3) 菱川晶子「小石エイ嬸の昔語り—岩手県上閉伊郡大槌町の伝承—」(二)『一般教育論集』第四〇号 愛知大学一般教育研究室、二〇一一。
- (4) 大槌の民話編纂委員会編『大槌の民話』（岩手県大槌町役場、一九八三）一六五頁。
- (5) 調査報告では引用箇所を話の一部として記しているが、今回は話の区切りが良かったため分けて記載した。
- (6) 菱川晶子「小石エイ嬸の昔語り—岩手県上閉伊郡大槌町の伝承—」(五)『一般教育論集』第四十五号 愛知大学一般教育研究室、二〇一三。
- 本話は、運定め譚や「狼の眉毛」にも類する複雑な話である。類似した話としては、隣接する遠野市に伝わる「狼の眉毛」がある。また、同県紫波郡には運定め譚の中に「狼の眉毛」の話が組み込まれたものがあり、こちらは女性の方に福分があるため、夫と別れて人間に見える男と一緒にやり、やがて落ちぶれた元の夫を酒屋の竈の火焚きとして雇ったという内容である。別れた相手をまた家と呼ぶという点では、こちらの方が近いかもしれない。
- (7) 菱川晶子「小石エイ嬸の昔語り—岩手県上閉伊郡大槌町の伝承—」(一)『一般教育論集』第三十八号 愛知大学一般教育研究室、二〇一〇。
- 同じ下閉伊郡岩泉町に類似の話が伝わっており、木の根からの犬の登場や、犬の援助で鹿や米や雁等を得られたという話は、岩手県を始め、東北地方を中心に伝承されている。
- (8) 註(3)の文献に同じ。河童を祀った祠は水虎祠と呼ばれることが多いが、エイ嬸は水天宮と伝えている。
- (9) 沢館栄吉『昭和五十五年九月調査 山岸八幡宮写真』大槌町文化財保護審議会、一九八〇。
- (10) 註(3)の文献に同じ。